

入選

テーマ：誰かのために、わたしが出来ること 「私ができること」

東京都・光塩女子学院高等科2年 李代 絢香

太陽のやわらかな陽射しに包まれる春、弟は半年の闘病生活の末に天国へ旅立っていった。どんなに辛い治療の時でも、家族のことを気にかける明るく優しい弟だった。

小学六年生の十月、弟と私たち家族の白血病との闘いが始まった。近年では白血病は八割の患者が完治すると言われていた。当初は、弟を含め私たち家族も担当医からそう説明された。だから、まさかこんなに早く弟との別れが来るとは思わなかった。治る、治ってまたみんなの所へ笑顔で帰ると決心して始まった闘病生活はすさまじいものだった。私は涙を堪えながら、弟の心が塞がないようにと話し続けた。両親は弟の前では冷静に明るく振る舞っていた。しかし、病棟を後にする二人の心はいつも切なさで、弟に明日という日が来ることを祈る日々だった。

現代医療でも限界はある。今死を迎えようとする弟の前に、なす術もない医師の姿があった。私は医師になることを志していただけに、たとえ自分が医師になった時、何が出来るのか、不安に駆られ完全に先を見失ってしまった。かけがえのない存在を失ったことで、私の心にぽっかりと穴が空いた。泣きたい感情を無理やり封じ込め、淡淡と毎日を過ごすことで弟の死と自分の夢に対しても直視することを避けていた。

二年の歳月が過ぎた冬、私は弟が入院していた病棟の看護師さんに連絡をとり、会うことになった。彼女もかつて弟を病気で亡くされていた。入院中も私たち姉弟を気遣い、弟の他界後も手紙を下さる方である。私は自分の気持ちを話してみることで前へ進めることを望んでいた。彼女の経験を聴き、私の気持ちも伝えた。そして今私が抱えて

いる悲しみや不安は当然あることで、十分頑張っているのだから無理して頑張らなくてもいいと教えられた。

北海道滝川市に難病と闘う子供の医療付キャンプ場「そらぶちキッズキャンプ」がある。

私は今年の夏に訪問した。そこは弟が生前、病棟の戦友と共にこうと約束していた場所でもある。健康な子供と違って、病気を抱えている子供には普通にできることができないということが生じる。小・中学校の修学旅行も持病がありその為に自分で施す処置があることを理由に学校から参加を断られることもあるという。このキャンプ場は難病の子供たちとその家族が共同生活と自然体験を通して「生きる力」「仲間」「希望」を感じられる場を提供している。

訪問中ある少女の話を聞いた。体に障害のある少女は不安を持ちながらもキャンプに参加したことで自信と勇気を得る。後に彼女はボランティアとしてキャンプに参加する。しかし、障害のある体の彼女であることには変わりない。障害のある自分が子供たちに何が出来るのかと悩んでしまう。その時スタッフの一人が「今あなたにできることをすればいい」と声をかけた。その言葉は彼女の心に届き、そして、私の心にも届いた。

私たちには明日を迎えられるという保障などない。私たちが今日を生き、明日を迎えられるということは奇跡の連続が積み重なっているにすぎない。病気と共に生きる子供たち、その子を支える家族、共に様々な壁が立ちほだかるのにも負けず「生きよう」としている。その人たちの隣には今できる最大限の治療を施す医療者がいる。大切な私の弟を失った心の穴はこの先も埋まることはない。でもその心の穴から見えてくるものはある。これからの私は、一つでも一つでも今の自分に行えることを行い、一步一步夢に向かっていくことだ。弟や私たち家族に寄り添って下さった医療者の方々のように、私も難病の子供たちと共に今を生き、寄り添える医師になりたいと思う。